

## 厨川白村博士の横顔

——三十年忌を記念して——

衣笠梅二郎

成程、広島と長崎とに投ぜられた原爆の惨状は、実に名状し難いものではあつたが、このために大正十二年の関東大震災の悲しい記憶は、私達の心から消え失せるといふことはない。毎年九月一日、関東大震災の記念日が廻つて来る度に、正午前の一とき暫し黙禱を捧げながら、しみじみと思ひ出されることの一つは、震災に基づく厨川白村博士の不慮の死である。私は震災後即ち博士の死後にその旧蔵書を幾冊か得たことがある。その中には山宮允氏がその編著“An Anthology of New English Verse”を、特に総革の豪華本に仕立てて博士に贈呈したものも含まれていた。同詩集の誤植に一々克明に筆が加えてあるのには、博士の几帳面さが偲ばれてなつかしい思ひがする。博士の蔵書には何れも蔵書票が貼附され、且つ署名して書物入手の年月が記してある。蔵書票に描かれた博士の横顔を見ては、「オスカア・ワイルドなんて気障な奴ですよ。ここに居合わせば殴りつけてやるんだが。」と言ひ言ひされた様子を想ひ起す。このような時には私は博士の不自由な足を傷やしそうに眺めたものである。博士がワ

イルドを嫌われたことに關しては、矢野峰人氏も教室に於ける博士を回想して、『英語青年』第五十卷第二号に次のように語つていられる。「英吉利の文人中、ワイルドは先生の最も忌む所となつていた。彼の名が出る度に『よほど気障な男だつたに違ひない』と口癖の様に言われた。」

私達が博士から与えられた講義は文学概論であつた。この講義はその一部分が後に『改造』誌上に現われ、博士の歿後に纏められて『苦悶の象徴』と題して出版された。若しも天が博士に更に齡いを貸していたならば、この一卷の論文は『近代文学十講』のような堂々たる体裁を具えて、世に送られたであろうにと今更らしく思うのである。同書の卷末に山本修二氏は次のように記していられる。「深い造詣とふくよかな鑑賞の力とが、不思議な融合をつくつていた先生の講壇に於ける面影は、わずかに本書の中に残つてゐるのみだ。」なお、同氏は同じく卷末に次のように追憶していられる。「鎌倉の十月の秋日和の日、厨川の奥様と矢野君と私とが、先生の別邸の塵壇に立つて、そぞろの思ひに暮れて居るとき、土搔ぎの人足がブラウン・ベエパアの一包を探り出して、私たちのところに持つて来た。それがこの『苦悶の象徴』の原稿であつた。」博士が私達に与えられた講義の草稿もまた、褐色の紙包みに収められていた。白日村舎の跡から掘り出されたかの紙包みは、私達が常に教卓の上に眺めたそれではなかつたらうかと、妙に果敢ない想像を逞しうしたことがある。

足の不自由な博士は女子学生が穿くような、ボタン留めの簡単な作りの短靴を穿いていられた。場所は同志社大学構内に於ける、赤煉瓦の致遠館階下の小教室である。博士のために特に便利な階下の教室が選ばれていた。常に椅子に坐つて諄々と講義を続けられたが、板書をする度にやあら立上られるのが如何にも大儀そうに見えた。Ellen Keyと黒板に記しては大きな教卓に身体を支えながら、「エレン・キイではありません。エレン・カイと読むのですよ。」と、注意された面影がまざまざと浮んで来る。板書をして頂くのは本当に結構ではあるが、その度に立つたり坐つたりされるのはまことにお気の毒なことだと、心筋かに思つた者は私のみではなかつたであらう。次に私達が与えられた博士の講義は、Galsworthy の “The Fugitive” であつた。Galsworthy はガールスワージーではなく、ゴールズワージーと発音するのだと注意され、巻頭の引用句をも取上げられて、「Dickens の “Donkey and Son” の Chap. V にあります。」と、詳細に説かれる懇切さであつて、私達のためにその蘊蓄を傾倒された。博士の講義は実に平明暢達であつて、縦横自在に豊富な語句を駆使され、しかもこれ等の言葉は博士自身の心から、新らしく油然と湧き出る観があつた。博士の深遠な魂の躍動せる講義を聴くことは、当時の私の喜びの一つであつたのである。

上記の山宮氏の “An Anthology of New English Verse”

は、沙翁学者でもあつた故ロンバード教授が英詩の講義に用いられた参考書であり、また、博士と矢野峰人氏との編纂になる “The Later Nineteenth Century Poets” は、故嶺岸四郎教授が採用された教科書であつた。伝え聞くところに抛れば、同教授は東大名誉教授、東京女子大学学長、斎藤勇博士と、仙台の二高及び東京大学を通じて同窓の友であつて、学生時代には同博士と輪贏を争われたものだそうである。同教授の不幸な早世を悼む者は、特にその恩顧を少なからず蒙つた私のみではあるまい。私が得た白村博士の旧蔵書の中に、この後者の英詩集も含まれていて、同書にはどうしたところか、埃つぼい若干の砂利が各頁の間に挟まつていた。痘痕のように様々の砂利の形が、紙面に印された同書を披見する時、私には不思議にもかの大震災の惨状が聯想され、博士のロマンティックな最後が痛切に回想されるのである。大正十二年九月と言えば、丁度前年の七月にシェリの百年祭を催したばかりの時である。海嘯の厄に遭遇された博士の訃音は、期せずしてスペチャ湾頭に於けるシェリの遭難を想起させたのであつた。

第二学期の授業に間に合うように一足先に帰浴した令息達に、鎌倉から送られた博士の葉書は絶筆となつて、『英語青年』第五十巻第二号に掲げられている。子煩悩な博士の半面を知るよすがとして、その一節を次に引用しよう。「文夫次郎 守ど」 「帰りの汽車は随分暑かつたらう。守や次郎

は車中で上衣をぬぐ事を知つていたか 両親が帰らない前でもよく室を清潔にして勉強すべし。」当時京都府立三中の四年生であつた、長子の文夫氏の稔々しい姿が私の記憶に甦つて来る。博士の不慮の死を機として遺族の方々は東京へ転住されることとなり、同氏も麻布中学校に転校されたが、平安神宮の東側に在る博士の旧邸の傍らを通り合わせる時、私は書齋に於ける博士の姿をふと心に描くのである。そして関西学院大学教授の芥川瀧氏が未だ学生時代に、たまたま、博士の不在中に来意を伝えたところ、芥川龍之介と間違えられて歡待の用意をされた、挿話が思い出されておのずから微笑ましくなる。また、平安神宮の裏通にお辰稻荷という社があつて、その前を電車などで通過する折には、妙に博士の名前の辰夫が聯想されるのである。嘗て京都大学に開催された日本英文学会第六回大会に於て、東京から馳せ参じた文夫氏の実に堂々たる講演を聞いて、地下の博士と共に喜び且つ意を強うした者は、果して博士の門下生のみであつたであらうか。講演後父博士よりも遙かに背が高く成人した颯爽たる同氏を指して、山本修二氏は「本当にお父様によく似ていますよ。」と、如何にもわが事のように嬉しげに語られたのを想い起す。

成瀬無極博士の『東山夜話』所載の「断腸記」は、博士独特の軽妙洒脱な諧謔が縦横に織込まれていて、却つて断腸の思いをすることなく寧ろ安易な心持で読まれるが、白村博士

の筆になる「左脚切断」には、みじめな重苦しさが多分に見出されて思わす心が暗くなる。大正十年の秋、「近代の恋愛観」を東西の兩朝日紙上に連載して轟々たる反響を喚び起し、論敵への応酬に「再び恋愛を説く」「三たび恋愛観に就て言う」の二篇を重ね、更にこれ等を一卷として世間に問うては洛陽の紙價を高め、晩年比較的華やかであつた博士にも、このような傷ましい半面があつたのかと、今更のように「左脚切断」を読み返したものである。なお、その最後の一節に博士は己が容貌に関して次のように述べていられる。「外のことは兎に角、容貌からして先ず頗る平凡だ。美男でもなければ、さりとて別に醜男でもない。横目豎鼻の何の奇もない面をさけている。勿論その目たるや、学生時代に或男が八方睨みの掏摸だと評した位に多少ぎよろつて、異彩を放つてはいる。鼻なるものも亦日本人には珍らしいほど高く、気障な鼻眼鏡が安全にかかる位のものだ。」脚部切断の年、即ち大正四年に於ける博士は三十六歳であつたから、私達が文学概論の講義を聴いた大正九年には、博士は正に不惑を過ぎること一歳であつた訳である。思えば文学博士の学位を受けられた丁度翌年に相当する。

私が博士から受けた第一印象は、貴公子的であると共に幾分女性的という感じであつた。女性的なのは不幸にして足が悪いので、自由に運動が出来ない故であろうとも解した。嘗て聴講生の一人が博士の所説に対して、常軌を逸した質問の

矢を放つた時、博士はやや色をなして皮肉な調子で、「私の著作を全部読んだ上でないと質問する資格はありませんよ。」と応酬されたが、その際にも博士の眼が多少でも、変にぎよろつたようには思われない。博士の眼は寧ろ豊かな限りない知性の光に輝いていた。遙かに異彩を放つておつたのは、高邁な思慮の深さを思わせる博士の広い額と美事な高い鼻とである。「私の鼻にはパンス・ネエが掛ります。」とは、講義の際に何かの比喩に挙げられた言葉であつた。私が少年時代に弄そんだ「家族合せ」と称するカルタに、「大学教授花輪高」という札があつたのが愉快に思い出される。八方睨みと言えば藏書票に描かれた博士の横顔の眼は正に八方睨みである。古代エジプトの壁画に見る人物の横顔の眼である。藏書票のペンで描いた無数の桜の花と薔薇の花とに囲まれた、広い額と高い鼻の博士の横顔には、華々しい文芸の戦士の面影が偲ばれる。

昭和十年十月、京都在任の博士の知己門弟達が發起人となり、東京からわざわざ嗣子の文夫氏を招いて、京都大学の楽友会館に博士の十三回忌記念講演会を催したことがある。確か山本修二氏が開会の辞を述べられたように記憶する。その際文夫氏の声が父博士のそれに酷似していることを指摘されたが、壇上の正面に掲けられた躍如として真に迫る博士の油絵の肖像は、同氏の声を吹き込めば恐らく口を開かれたことであろう。三高時代の同僚の滝川規一氏も講演者の一人であ

つたが、先ず額の広い博士の肖像を眺めて、「その後君の額はどれ程禿け上つたか聞きたいものだ。」と大声に尋ね、前の講演者の退屈な講演に依つて、堅苦しくなつた満場の空気を一掃された。三高の書庫に学生達を案内しては、外国文学の書架の一つの前に立つて、「厨川君の『近代文学十講』の種本はこれだよ。」と放言された、滝川氏の相変らずの無邪気な傍若無人振りである。氏の講演が終ると直ちに司会者の板倉篤太郎氏が立上り、白村博士に代つて滝川氏の質問に奇抜な回答を与えられた。「少しも禿けていない。」というのである。即ち負け惜しみの強い博士は実際に頭が禿けていても、恐らく否定されるであろうと愉快に答えられた。博士の負け惜しみの強さもさることながら、博士の皮肉は実に辛辣且つ痛快を極めていた。嘗て文学を以て露骨に思想善導の具に供しようとするかのような、所謂実利的文学者が時勢の推移と共に現われたことがあるが、若しも博士が在世されたならば、「文学を浪花節と間違えては困るよ。」と、博士独特の皮肉を浴びせ掛けられたことであろう。

第廿五回日本英文学会大会は東京の法政大学に於て開かれたが、その際大内兵衛総長はわざわざ草稿の用意をして、「英語の先生の想い出」と題する特別講演を興味深く試みられた。大内総長の淡路島に於ける洲本の中学生時代には、青嵐居士、永田秀次郎氏が先ず英語の先生として現われる。次いで熊本の高生時代には、『沙翁全集』の浅野馮虚との共訳

者、姑射、戸沢正保氏と共に、若き日の厨川白村博士が登場する。漱石の『虞美人草』に描かれた小野のモデルが青年時代の白村博士に擬せられ、藤尾のそれが蝶子夫人に喩えられたのは、既に過去の語り草として忘れ去られ、今更らしくこのような話題を取上げる者は殆んど無くなつた。大内総長の愉快な思ひ出話によれば、五高生としてのこちたき熊襲の子孫共は、新婚の夢まどかな博士の夜の宿をしばしば襲い、二階の障子に映る夫妻の影を認めては、博士の声音を真似て夫人の名を呼びわり、闇に紛れて逃げ失せたのである。ところが、翌日英語の教室に出席すれば天罰靦面にて、一同の者は散々小突き廻され、したたか油を搾られては、辛辣極まる皮肉の矢玉を雨霰の如く被つたという。博士は外遊を前に控えて不幸にも左脚を切断され、その後不自由な身をもつて渡米されたのである。たまたま、これも外遊中の大内総長と宿舍を同じくされることとなつたが、政府から支給される費用は、博士のそれよりも教え子の方が、遙かに上廻つたそうである。負け惜しみの強い博士が「出藍という言葉があるよ。」と、大内総長に語られたかどうかは残念ながら聞き洩らした。慶応義塾大学教授、文学博士、厨川文夫氏も聴衆の一人であつたが、神ならぬ身の大内総長は知る由もなく、若き日の白村博士の横顔を、天真爛漫に大きく写し出したのである。大内総長が今日あるのは、博士が講義の時間毎に教卓の上に置かれたという、光榮ある恩賜の銀時計をつくすくと眺めて、

緊禪一番すべきことを教えられた賜物ではなかるうか。

矢野峰人氏は太田三郎氏訳のハーン文学論集『人生と文学』の解説の一節に、次のように喝破していられる。「一般に大学に於ける文学の講義が面白くないという批難の声を聞く事既に久しい。これは、一つの作品に就いても他からの権威を借る事無くしては何一つ語り得ざるが如き所謂『教授』所謂『學者』が、蓄積されたままで不消化状態に在る知識を羅列する事により、文学の研究を裝飾的ならしめたためである。」今にして私は博士が日本文学に對する深い理解の鞏固な基礎の上に立ち、外国文学を完全に咀嚼玩味して自家葉箱中のものとなし、眞の文芸とは如何なるものなるかを、独自の立場から如実に説かれたことを回想する。大正の初年に文部省文芸委員会が全国にわたつて、広く俚語を採集して『俚語集』を編纂したことがあつた。博士は私とのたまたまの談話に際して、同書が歌詞を徒らに纏めて一卷としたものに過ぎず、歌曲が無視されていることを指摘して歎かれたことがある。このように博士が文芸へ寄せられた関心の広さと深さは、私の心を強く捉えたものであつて、博士を思う念に転た切なるものがある。また、博士は高踏的に空しく研究室に盤踞して、時代の潮流に押流される術学者とは全く選を異にしてゐた。博士はいさぎよく象牙の塔を出て、あまねく一般民衆とも伍し、時々刻々転変極まりない十字街頭を往く、眞実一路の文芸の巡礼者でもあつたのである。